

みなさん、こんにちは。もう三月でございます、前回から七高僧の中の龍樹菩薩のところに入っていることでもあります。今日は龍樹菩薩の二回目ということでありまして、テキストの十四頁ですね。十三頁が前半で、龍樹菩薩の生涯の御徳を讃えたところでもあります。今日のところは龍樹菩薩の教えられた教えの内容ということ、宗祖が感動を持って三行六句で歌われているというところでもあります。十四頁のところを全部ですね、全部進まないと思いますが、話をさせていただく上で流れもありますので、一応三行、現代語訳と一緒に拝読させていただきます。ゆっくり読みますので一緒に声をお出しくださいませお願い致します。

顕示難行陸路苦 信樂易行水道樂

龍樹菩薩はさとりにの道を明らかに示し、  
陸路をただ一人自力で歩く、  
苦しい難行よりも、みんなと共に船に乗り、  
仏力に任せて楽しく渡る念仏の易行道をすすめられました。

憶念弥陀仏本願 自然即時入必定

だから、阿弥陀仏の本願を忘れず心に憶（おも）い  
念じるならば、本願自然（じねん）のはたらきで、  
即座に、必ずさとりを開く身と約束され、  
迷いに退かない身になります。

唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩

ただよく、常に如来のみ名を称えて、  
大いなる悲願の恩恵に応えよ、と説いています。

どうもありがとうございました。

龍樹菩薩の生涯の教えということ、非常に簡潔に深い感動や喜びを込めて歌い上げられておりまして、私たちにこういう道が開かれておるのだということ、驚きと共に大変有難く感ずる所でもあります。

いつものように、感じたことを二つ程、申させていただきます。今日は三月十日でありまして、一九四五年、昭和二十年三月十日未明、東京大空襲がありました。太平洋戦争中ですね。米軍のB29爆撃が三百四十四機程来ました、夜間に。焼夷爆弾が落下すると焼けるのです。大変無惨な爆弾であります。

その焼夷爆弾が落とされて、死者が約十万人。焼失家屋は二十七万戸ということで、大惨事でありました。四月十三、十四日は東京の西部地区が爆撃を受け、五月二十四日には山の手地域が爆撃されて、三回の大空襲によって東京の約半分が焼け野原になったと。三百万人以上が被災したということが、七十二年前ですか。今の東京を見ているとそういうことは思いもつかないかも知れませんが、七十二年前の焼け野原になったということ、私たちは何年経っても忘れてはならないと思います。

人間は忘れやすい動物ですね。七十年位経って、些か揺らいできているような感じがしてならない面があるのであります。本当に忘れてはならないということ、明記しなければならぬと思

ます。これは私たちばかりだけではなく、後から来る人たちの為にも、絶対に戦争はあってはならないと、してはならないと、起こしてはならないと、殺しても殺されてもならないということは明記すべきであろうと思います。

それからもう一つはご承知のように、冬季オリンピックがありました。今はパラリンピックがタベから開催されておりますけれども。オリンピックで私、たまたま見ておりました感銘を受けた場面がございます。それは二月のスピードスケートの五〇〇mで、日本の小平奈緒さんという方が一位になったのです。二位は韓国の李相花（イ・サンファ）という方でした。

二月十八日に行われたスピードスケートで印象に残りましたのは、一位の小平奈緒さんと、二位の李相花さんが抱き合っただけ、感動して泣いて喜んで、お互いに称え合っている姿です。インタビューもありまして、小平さんはこれまで李相花さんと交流があって、助け合ったり、励まし合ったり、挫折をしたときに共に励まし合ってきたのだということをお話されまして、私は感銘を受けました。

いわゆる国境とか民族を超えて、友だちとして出遇っているということが、短い時間の中で感動的に表現されておりました。まさにオリンピックを行なう精神ということが、現れておるような印象を持ちました。オリンピックにおいては、国境民族を超えて出遇えるのに、政治の世界においては中々出遇えないという問題があります。

最近、大きな願いをかけて期待するのは、北朝鮮とアメリカ、韓国の対話の兆しが見えているということで、本当に対話が実現し、本当に核兵器のいらぬ社会が実現していければなど。まあこれは長く遠い課題だと思いますが、そういうことが思われてなりません。「正信偈」は、そういう問題と全く無関係ではありません。

「正信偈」の前半は釈尊の教え、真実の教えとして説かれ、それを敬われてきた『大無量寿経』の教えを中心にして、本願念仏の教えが説かれ、その教えを印度・中国・日本に渡って、仏弟子の方々が相続して来られた。

これもね、国境を越え、民族を超え、時代を超え、それぞれの国の政治状況とか色々な条件を超えてね、釈尊が明らかにされた真実の教えを相続してきた。そういうことが浄土真宗であるし、「正信偈」の中に、そのことがあの短い偈文の中に歌い上げられているということは、まことに感動深いことでもあります。

私たちは「正信偈」をいただくことによって、親鸞聖人に会い、親鸞聖人が敬われ、崇敬された仏陀釈尊に会い、親鸞聖人が敬われていった七高僧、印度・中国・日本の七高僧にお会いすると。ここに軸が掛けられておりますが、こちらは聖徳太子ですね。親鸞聖人がまことの教主と敬われた聖徳太子。そちらに七高僧ですね。七人の高僧の方々。念仏者の代表の方々。龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空と。こういう七人の高僧の方々、念仏者の方々、沢山いらっしゃる念仏者の方々の代表をするような方々であり、仏陀釈尊の教えを本当に命がけで受け止められて、明らかにしていかれた。

そこには末代までこの真実の教えである本願念仏の教えが伝わるようにという願いを込めて、明らかにしていかれた。そういう伝統をまさに今、私たちがこの場で受け取るわけですね。話ではなくして、事実としてもうこの身に、この生活に受けているのであります。

だから私たちが「正信偈」のお勤めをさせていただくということは、そこに紛れもなく仏陀釈尊のお教え、七高僧のお教えを、親鸞聖人が讃えたお言葉を通して、この身に、生活にいただいくことができるという意味を持っておるのであります。

前置きと申しますか、いつもの雑談のところはそのくらいにさせていただきまして、今日は先程拝読させていただきまして、龍樹菩薩を讃える。これもね、大変スケールの大きいというか、大胆

というか、大変なことです。印度の釈尊のおおせに今、遇える。龍樹のおおせに今、遇えるという  
ようなことはこれはもうね、並大抵ではないね、凄いことですよ。

言うならば、テレビや電波の普及する以前の話ですよ。それはもうね、印度へ行くのに命懸けで  
ね、何か月もかかっていくような。関東から京都に来るのも命懸け。そういう時代に、この本当に  
大切なものがこの後に伝えられて、すべての人々と共に親鸞聖人に会うことができる。

私は親鸞聖人が明らかにされた教えは、親鸞聖人の視野の中には、ご覧になる目の中には、三世  
十方の衆生ということがお有りになったということです。三世というのは過去・現在・未来ですね。  
十方というのは地球も包まれるような、あらゆる衆生です。生きとし生けるもの。衆生ということ  
は人間中心主義ではない。

放射能が人間の営利の中から出てきて、そして大震災が起こって、放射線漏れが起こって、当時  
では大惨害。未だに避難をしておられる方々が沢山いらっしゃる。作った米とか、飼育している動  
物なんかも被害を受けて、食べることもできないというふうな、そういう問題が起こっています。  
人為ということは、非常に大事なことでありますけれども、そこにはやはり、人為には人為の闇が  
あるわけですね。電気を作っていたらということにおいては、人間にとっては便利かもしれませ  
んけれども、放射能においては、いのちあるものを殺すということになると、これ程の酷い害毒は  
ないと思いますね。

何遍言っても言い過ぎではないとは思いますが、広島で原爆、長崎でも落とされて。人  
類初めての被爆という。私はそういうことは日本人たちがよく心に目にしなければならぬと思  
いますね。やっぱりそれは世界の人に、被爆をするという体験が、決して起こってはならない、起  
こしてはならないということをするべき、言わずにおれない国ではないかと思われてならないので  
す。私たちが今、生きている国は様々な問題をいっぱい抱えておりますが、そういう問題を抱えた  
中で、親鸞聖人の教えに会うということは、更に意味が深いというふうに思います。

先程拝読したところの大意はですね、「顕示難行陸路苦 信楽易行水道楽」というこの一行では、  
易行の大道が明らかにされています。今日の一段を、私は「易行の大道」という見出しをつけたい  
と思います。易行というのは、誰でもがいつでもどこでも称えることのできる、人間の力を超えた  
如来の真実の大道。大いなる行ということは、普遍的な意味ですね。根本の行であり、普遍的な、  
誰もが称えることができるという、一切を包むようなそういう、易行の大道ということがまず表さ  
れております。

それから二行目、「憶念弥陀仏本願 自然即時入必定」のところでは、この念仏を申すというこ  
とにおいて、弥陀の本願を憶念することにおいて、自然に必定に入ると。必定に入るとい  
うことは、必ず仏になる身。丁寧に言えば正定聚の位ですけれども。また不退転。退転しない。人間  
の生活は、この必定。必ず仏になる身に定まるといふ。これを見出すということが根本の課題であ  
るといふことを、私たちは真宗の教えに会うことにおいて教えられるのであります。

もしこの本願念仏に出会うことにおいて必定に入るといふ、必ず仏になる身に定まるといふ教え  
に遇わなければ、金を貯めて、命終わっているだけの。まあ細かくいう必要はないのですが、そ  
ういう形で安定ということを保っていくしかない。それは勿論絶対ということはないわけで、いつ  
でも危機の中にある。

あと若い頃は不安があるわけですね。東北の大震災も他人事ではありません。東京湾に来てもし  
不思議はないわけです。だけど心の深いところでは大丈夫だろうと思っているかもしれませんが、  
歴史の事実は起こったということがあるわけですから、二度ないという保障はありません。人間は  
いつでも危機の中にある。そういう危機を抱えておる人間がいかにして生きていくことができる  
か。そういう根本の問題に、応えて表れている。本願を憶念することとは必ず不安や危機感の

中で生きておるということをいただいて生きていくことができるということですね。

「唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩」というところには、念仏して生きる道は、常に如来の名を称すると。私たちには、呼ぶことができるものがあると。現世は人間不信の時代であります。依り処がない、ニヒリズムという。何も頼るものがない。非常に深刻な問題を抱えております。虚無主義ですね。ニヒリズム。ニヒリズムになりますと、何もしないわけではないですよ。快樂主義になる傾向があるわけです。どうせ短い命なのだから、食って何とかして命終わっていかうという。そういうね。いわゆる快樂主義に陥ってしまう。そうなりますと本人も周りの人も無惨ですね。

まあ遊びと言っても、家屋敷も賭博にかけて取られることもありますからね。そういうことで泣いてきた人たちがどれ程いるかわからないのですよ。だからそういう人間の危機の中で、龍樹菩薩が難行易行という問題を明らかにし、易行の大道が本願を念じて安らかに生きる道がある。念仏が本当にこう大悲弘誓の恩に報ずるといふ。

報ずるといふことも、大変なことなのです。大悲弘誓の恩に報ずるといふ。これが損なわれるならば、いわゆる神社とか有名なお寺さんに行くとかね、報ずるより願うのですよ。祈願なのです。幸せにしてくださいという。金儲けさせてください。災難に遭わないようにしてください。火事にならないようにしてください。殆ど祈願でしょ。そのために祈祷するという。お念仏の教えをいただくと、まことの信心をいただくといふことは、祈願ではありません。祈願をしておったと、祈願する心がまだあると。まことに恥ずかしいことであると。もう既にこの身が大いなる恩恵を受けているのではないか。それこそ親鸞聖人が最晩年に歌われました、恩徳讃ですね。

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし。

仏陀釈尊のおおせに会い、よき人のおおせに会い、七高僧のおおせに会うといふことは、身を粉にしても骨を砕いても、報じ、感謝し、応えずにはおれないようなことであると。これは親鸞聖人が八十五歳ですか。最晩年にね、こういう歌を歌われておるのですよ。何かね、火山にマグマという言葉がありますけれども、マグマが噴き出すような、烈々たる、噴き出すようなそういう謝念、感謝の心ですね。それは特別なことではなくして、およそこの世に生を受けたもの皆に、十方衆生のいのちに、そういう大いなる恩恵を受けているのであるといふ、叫びであると思えますね。勿論、親鸞聖人が言われるように、私たちは凡夫でありますから、二十四時間いつも感謝の謝念で一生というわけにはいかない。やっぱり煩惱妄念が起こってくる。それが親鸞聖人の仮名聖教の中では有名な、

凡夫といふは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころもおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと

(真宗聖典 五四五頁)

こうおおせられていると。そういう私たちが本願の仏道に会うのであります。これは非常に大事な、きちっとしっかりと凡夫の大地にね、足がついているわけですよ。夢や理想を語っているのではないのです。煩惱妄念が尽きない私たちに、私たちであればこそ、本当の空しく過ごすことのない道が開かれるといふ、そういうことが願われている。

龍樹菩薩は八宗の祖師と言われるようなまことに尊い、もう大人物ですね。第二の釈迦と言われる程の非常に優れた尊い方であります。その龍樹大士が本願念仏の道を表してくださって、難行道、易行道という目覚めの道に至るのに、難行道に例えられることがあるけれども、易行道が、本願念仏の道に開かれておるということを明らかにされていったということは大なる教えでありますね。今の一段の大意を申させていただきます。

私はこの「顕示難行陸路苦 信楽易行水道楽」ということの文は、三行に入る前にですね、忘れてはならないことがあると。龍樹菩薩ご自身が書かれました聖教の中で述べられていることでもありますけれども、

もし人疾く不退転地に至らんと欲わば、恭敬心をもって執持して名号を称すべし。

(真宗聖典 一六五頁)

不退転地というのは、仏になるべき道を歩む歩みにおいて、退転しないと。二度と地獄・餓鬼・畜生の三悪道の生活に戻らない。金儲けから知恵を得たぐらいではね、地獄に帰る可能性があるわけですよ。金を儲けたばかりに殺されたということもあるしね。盗まれるということもありますしね。

不退転ということが、人間が求めてやまない。疾くというのは早くということですね。不退転地に至らんと欲わばというのは、人間の欲望の欲ではありません。本当の願いですね。深い願い。人疾く不退転地に至らんと欲わん。これは菩薩の願いでありますけれども、私たちの一番深いところに動いている願いではありませんか。どんなに辛い、あるいは思うようにならない生活があっても生きている、生きていく。そのことがかけがえのない大なる意味がある。生きれば生きるほど、深い意味に出遇っていくという、そういう人生に遇いたいと。

まあ個人的なことですけども、私も老年になってまいりました。このところ老年だと思ふようになりましてけれどもね。自分自身が老年になってみて、ああ老年というのはこういうことなのかということの一つひとつ教えられつつあります。やっぱり若い時はどうしても外から見ているのですね。老年のことを仮にわかっていると思うようなこともあってもね、中々わかっていると思うとは言えないのではないかと。わかる範囲でしかわかっていないという。

それは老年として生きるということは、新たな出遇いがあるということでもあります。考えたような人生ではないと。ああこういうことであつたのか。あるのか。いのちのある限りですね、出遇いがある。そこにおいて人生が深くなる。出遇いが広がる。例えて言えば自分自身が老年とはこういうことであるかということに気が付いたとき、先立っていかれた人たちに出遇うわけですね。

私の父親は数えて、八十八歳で逝かれましたけれども、ああ八十を過ぎるとこういうふうなことであるのかと出遇うのですよ。それは皆様お一人おひとりがね、ご生活がお有りになるのですから、生きるということは、お念仏の教えをいただいていく、聴聞ということをお教えられていく。出遇いの世界が広がっていくと。深まっていくということであると思います。というよりは、ありますと。はっきり言えるようなことだと思ひますね。

もし人疾く不退転地に至らんと欲わば、恭敬心をもってという。龍樹菩薩から恭敬心をもってと言われますとね、自分の中に恭敬心があるかと。恭敬心というのは敬う。本当に尊敬するということですね。恭敬心をもって執持して名号を称すべしという。執持、これもね。執持して名号を称すべし。敬う心でね。本当に仏を敬い、お念仏を敬って。執持してということはいわゆる執着の執ではなくて、一心にお念仏一つに心をかけて、念仏を、名号を称す。名号というところには、私たちの上に呼びかけられてきたお念仏ですね。

これは余談ですけれども、恭敬心というものはね、なくてはならない心なのです。親子夫婦の間でね、恭敬心が失われたらどうですか。愛情は大事ですよ。だけどそこに敬って信頼できるということがなければね、カサカサというかカラカラではないですか。龍樹菩薩の恭敬心をもって、これは勿論念仏について言われておるのでありますけれども、本当に仏道ということを尊んで、敬って、教えを聞くということがないと本当にその人の身に付かないと思いますね。

恭敬心をもって執持して名号を称すべしと。念仏を称えましようと、こう龍樹菩薩が言われておるのです。これはもう大変なことだし、繰り返しになりますけれども、疾く不退転地に至らんと欲わばという、これは私たち自身の、やむにやまれない根本の要求である。

明治の才覚であります清沢満之先生はですね、

### 人心の至奥より出づる至盛の要求

いわゆる伝統的な仏語ではありませんが、人心の至奥より出づる至盛の要求。これが宗教なのですね。人心というのは人間の心です。もうすべて皆、人心があります。至奥というのは一番奥、一番深いところから出てくる、自然にね、湧き上がってくる。至盛のというのは最も盛ん。至というのは徹底しているのですよ。至という言葉は良いですね。至奥より出づる至盛の最も盛んな。やむにやまれない要求ですよ。

火事にあって家が焼かれたぐらいで、泥棒に入ってすっからかんになったぐらいで、至盛の要求は終わりますか。諦めてしまうということがありますよ。自死してしまうということもあります。しかしそれは自分自身の中に動いている声が聞けなかったということに原因があるのではないのでしょうかね。自分のことでありながら、自分のことに疎いということがございます、残念ながらね。本当の声が聞こえていないということがあります。

何故仏法か、何故念仏かということになれば、私たちの人間存在の一番深いところから湧き上がり、動いている。深い声に気が付き、教えられる。それが念仏であったということをおね、教えられる。そういうふうな、人心の至奥より出づる至盛の要求。これは清沢先生がね、こういう言葉でおっしゃっておられるということは大変有難い。一部の特別な人だけに宗教心があるってそんなちやちなね、そんな偏屈なものではないですよ。宗教心ということは、親鸞聖人が明らかにしてくださっておる浄土真宗の念仏に開かれる信心ということは、あらゆる人間の中に、はたらいておる。如来真実のはたらきとして人間を呼び覚ます。そういう仏のやむにやまれぬ願いであると。一人も無駄にしない。度外視しない。

これは親鸞聖人がよくぞよくぞ表現してくださった『歎異抄』の後序の、

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり

(真宗聖典 六四〇頁)

とおっしゃった。そういう私自身のためであったという。そのひとえに親鸞一人がためという一人は、単なる個人ではありません。あらゆる人間の、問題を抱えて生きておる一人ですね。十方衆生の中の一人。そこに一人に本当に出会う。この身、私自身に本当に出会うという意味があるわけです。

私自身に本当に出会うということは、自分だけを願うのではありません。三世十方の衆生に出会うという。そういう出遇いが開かれると、身近な感覚で申しますと、先立って行った親たちが、ご先祖の方たちが、諸仏となって私たちが本当に目覚め、助かることを願っておってくださいと。本

願の中に生きておられるという。祖先に対して供養するというようなそういう心を転じて、祖先の方々が諸仏となって、この身に願いをかけてくださっておるといふ。そういう大きな世界を開いてくださるといふ意味があると私は教えられるのであります。

この不退転地に至らんといふこの願いの中で私、大学に入って講義を聞いている中で非常に感銘を受けたことがあるのですが。人間には、怖畏がありますね。怖れです。怖も畏もおそれですね。五怖畏といふことで。不活の畏れ。悪名の畏れ。命終(死)の畏れ。悪道の畏れ。大衆威徳の畏れ。

不活といふのは生活できなくなるのではないかといふ畏れですね。これも中々ね、敏感ですよ。本当はこうしたら騙すことになるのだけれども、騙さなきゃ自分のほうが立たないといふような時に、やっぱり不活、生活できなくなる。

悪名といふのは悪く言われる畏れですね。これも嫌なのですよ、悪く言われるのは。

それから死。これは必ず死ぬわけですけどけれども、死ぬ畏れがありますね。

それから悪道。小さい時に大人たちから聞かされました。悪い時や、悪いことをしているとね、死んだら地獄へ落ちるのだよといふようなことをね。地獄に墮ちるとね、鬼が来てね、鉄棒で頭砕かれるのだよといふようなことをね、教えられました。悪道といふのは良い結果が来ないで駄目になってしまうといふことですね。

それから大衆威徳畏。たくさんの方々が集まってきて非難されるとね、たまらんですよ。これね、ものすごく敏感なものです。一対一で向き合って非難されるのと、二人か三人集まって一人に対して非難されるのではね、丸っきりといふぐらい違うのですよ。中学生や高校生でも二、三人集まるとね、力が出てきますよ。寄り合って、あいつやっつけようといふようなことで集中して来るとね、余程の人でないね。

これは一つの例えとして言ったのですけれども。理屈ではね、私は私なのだから、どんなところに行っても、どんな人に会っても、十万人といえども我如何と。余程の人はですね。そうありがたいけど、そうあれるかあれないかといふのは自分自身の現実です。大衆威徳畏といふのは強いといふことです。

そのことと反対に思いますのは、念仏僧伽、念仏者の人々の繋がりの中に遇う。ご縁をいただくといふことは、大いなる力をいただくといふことがございます。その僧伽を離れて自分が遠くで、一人で生きておりましたも、その念仏僧伽の力は、はたらくといふことがございます。念仏僧伽といふことをよく言われますが、僧伽、念仏に生きる人々、和合衆ですね。念仏に心開かれた人々の交わり。よき人のおおせに遇うといふことは、私は自ずとよき人々に集う、そういう人々に遇うといふ意味が同時にあると思えますね。

それは七高僧のお一人おひとりがそうである。親鸞聖人その人がそうである。法然上人にもまたたくさんの方々がいらしたといふ。だから仏法の恩徳といふことは、そこに人の上に本当に生きてはたらく。そういう恩徳をいただくと。だからそこにはね、やっぱり頼りになるのは私だけだといふ閉鎖的なものではなくて、本当に一人一人が大事であるといふことは、申すまでもないけれども、この一人一人を支えておる大地ね。ここに目が開かれるといふことですよ。一人一人を支えておる大地。

先程申しました五怖畏ね。生活できなくなるのではないか。悪く言われるのではないか。死んでしまうのではないか。悪道に墮ちるのではないか。人々から責められるのではないか。これは私たちの日常生活の中では、起こってやまないような事柄であろうと思ふのです。

何故こういうことを申し上げるかと申しますと、自分自身の中に畏れを持ち、危機感があるのだといふことに気が付かないと、尊い教えを聞いても人様の為の教えではないかと。私とは無関係だといふふうなことになるとね、それこそ釈尊の教えを、印度・中国・日本といのちをかけて伝えて

くださった方の御恩に響くことにならないという問題があると思います。そういうことをですね、  
思いますね。

そして「顕示難行陸路苦 信楽易行水道楽」。これの読み下しは、

難行の陸路、苦しきことを顕示して、易行の水道の楽しきことを信楽せしむ。

(真宗聖典 二〇五頁)

私の現代語訳では、

龍樹菩薩はさとりの道を明らかに示し、陸路をただ一人自力で歩く、苦しい難行よりも、みんなと共に船に乗り、仏力に任せて楽しく渡る念仏の易行道をすすめられました。

というふうにさせていただいております。

まずこの顕示ということは、顕かに示されるという。まず難行の陸路の苦しいことを顕かに表して、そして易行の水道の楽しきことを信楽せしむという、「信楽易行水道楽」。非常に明快に「正信偈」に歌われておりますね。

難行に対して易行という。陸路の苦しみに対して、水道の楽という。顕示ということに対して、これは顕かに龍樹菩薩が示してくださるということですが。信楽ということは本願の念仏を易行の水道の楽を信楽する。信じて、任せて生きることができるという。そういうことが非常に明快に表されておりますね。

これはもう命懸けの戦いと申しますか。苦難に遭って、苦難を克服しようとするそういうような戦いの中から見出したという意味があるわけです。これは『教行信証』にも引かれている言葉なのですが、龍樹菩薩の表された易行品。易行を表すという易行品なのですね。法というのは易行を表すという一節という。易行品にですね。

仏法に無量の門あり。世間の道に難あり、易あり。陸道の歩行はすなわち苦しく、水道の乗船はすなわち楽しきがごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便の易行をもって疾く阿惟越致に至る者あり。

(真宗聖典 一六五頁)

世間の道に困難と、優しい大悲がある。陸道の歩行（ぶぎょう）、歩行（ほこう）ですね。すなわち楽しきがごとしと。菩薩の道を求めて仏になろうとする道も、この世のものである。勤行精進というのは一生懸命に勤め励んでですね、夜昼なく精進する。煩惱を断って覚りを開こうと精進する。そういうものがある。信方便というのは如来の真実の信心が道として開かれてきた易行道。阿惟越致地というのは不退ということですね。阿毘跋致とも訳しますが、梵語を音で写して、阿惟越致という。

この阿惟越致の一字に意味があるわけではありません。音写と申しまして。阿弥陀もね、アミターバ、アミターユスを音で写して阿弥陀とこういうわけです。阿弥陀の意味は、「正信偈」の初めに歌われておりますように、無量寿無量光と。これが阿弥陀ということの意味なのですね。はたらきなですね。この阿毘跋致というのは不退転。人間が本当に願ってやまない不退転。初めてですね、龍樹菩薩が仏道には無量の門があるということをやられて、世間の道に難あり、易があるように、仏道にも難行道、易行道があるということをやられてくださった。

この路とね、道。同じ道なのですけれども、この路と道ということについて親鸞聖人はですね、非常にはっきりと明快に注意されております。

『教行信証』の信巻、二三四頁の終わりから三行目なのですが、

「道」の言は、路に対せるなり。「道」は、すなわちこれ本願一実の直道、大般涅槃無上の大道なり。「路」は、すなわちこれ二乗・三乗・万善諸行の小路なり。

(真宗聖典 二三四頁)

道と路とは、意味が違ふと。対するという言葉であるということ言われて、この路が自力の道であるのに対して、道は本願一実の道ですね。直道であり、無上涅槃に至る大道であると。すべての人々に平等に開かれておるといふ。易行の水道の道、大道ですね。

小路の路というのは、二乗・三乗・縁覚。自分自身が助かるということを中心にして行ふような、万善諸行。それが路であるといふ。二乗というのは声聞、縁覚。縁覚というのは独覚とも言われますが、声聞というのは教を聞いてそれを自分が喜んでですね、その教を頼るといふ。目覚めには違ひないのですけれども、狭い。そこには依頼性が強いわけですね。先生、先生と言っておるけれども、依頼心に立っておる。縁覚というのは、独自心はあるけれども、独善性が強いといふ。独善性が強いといふことを例えて言えばね、私は親鸞聖人の教をよく学んでいるのだと。親鸞聖人の教はよくわかっているのだと。そこらのお坊さんとは違ふよと。私程わかっているものはないのだと。人には言わないですよ。そういうふうになってしまう。念仏の僧伽ってということがね、見失われるといふことがあるのです。

私は一人一人の自立、独立といふことは、同時によき人々といふそういう僧伽。和合衆。そういうことに出遇うといふことが自然であると。自ずからそうであると思ひます。テレビやラジオや書籍や勿論、それは意味があるし大事だけれども、大きな問題となるのは、生身の人々に遇えるか。敬えるか。といふことが大事な問題だと思ひます。やっぱりこうして、お寺様に開いてくださってお遇いして聴聞するといふことが、親鸞聖人の教を敬い、今の時代を生きておる、よき人々に遇って、現実に遇って、お互いに確かめ合うといふことに大きな意味があると思ひますね。それは人間の涙や脂や、吐息や、汗。そういうものまでが感じられる世界ですね。

あえて申し上げましたのは、絵に描いたり紙に書いたりした綺麗事の世界ではありません。やっぱり遇って話すといふところには、人にも言えないようなこと、聞くに耐えないようなこと、そういうことが言えたり、聞けたり、話したりすることができると。もし仮にそこまでいかなかったとしても、あああの人も問題を抱えて生きておられるのだなと。私もそうですと、いふようなね。そういう人間と人間といふのは本当に相通する。相通うと。相通う。

これね、有無相通といふような言葉があるのですけれども、素晴らしい言葉ですね。有っても無くても相通じる、響き合う。相呼応する。言葉にしなくても通じるといふ。夫婦もね、本当に深まっていけばそこまでいくのではないですか。人間関係も、その人がそこでおられるだけで、違ふ。生きておると。安心だといふね。また厳しいと。これはあるのですよね。尊敬する先生が来られるとね、嬉しい反面、怖い。それは「中津、それはお前修行が足らんからだ」と言われたら「そうです」と言わなきゃならんのですが。そういう人に遇うといふことがありがたいですね。

「顕示難行陸路苦」といふ意味はそういうことですね。小路といふのは一人ひとり自分の足で切り開いて歩くといふことにおいて、個人の能力、才能といふことをどうしても中心にしてしまうと。またどれだけたくさん人がいても、小路といふところには、最後は一人であるといふことで、一つの閉鎖性、閉塞性を免れない。大道といふところには、直道、目覚めに至る、大涅槃に至る直道

であり、大いなる道であって、目的地にいけると。

小路というのはね、何ていうかな。一番、わかりやすい例で言えば、小路にね、いくつかの飲み屋があると。迷うことを楽しむわけです。小路というのは例えですよ。人間は小路が好きなのですよ。大道ばかり願っているという、まあ根本的にはね、大道を願っているのですけれども、小路に迷うのですね。自分の才能、自分の力。そういったものを優越感で威張りたいというのがあるわけです。叶わないと劣等感になるという。だから小路ということは非常に迷いやすい。人間の好きなね。まあそれは人間の性にまで沁みているものだと私は思いますがね。

大道は、目的地に、大涅槃の世界。目覚めの世界に必ずいけるといふ。皆共にいけるといふ。大道はね。自分だけじゃない。それはもう一つ言えば、目的地から開かれてきた道であるという。京都から東京へ行けるわけですが、それは東京から京都へ開かれてきた道でもある。同時ですよ。何が言いたいかという、目的地から開かれてきた道であり、共にいける身であると。己の才能で行くのではないということですね。

特に乗船。船に乗ることにおいて、皆共にと。個人の能力とか才能とかそういうことは関係なく、共に同じく運ばれていくと。それが易行道。非常に巧みな例で、水道に、船に乗っている。そういう信楽の道であると。信心の道であると。ということで表されているのであります。すべての人の救われる道に、我も人も共に歩いていくことができると。これが易行の水道であるということですね。

時間があつという間に立ちましたのでこの辺で切らしていただきたいと思いますが、最後にですね、親鸞聖人は和讃を沢山作っておられまして、高僧和讃も、勿論作っておられるわけですが、高僧和讃の十首の中の四首目ですが、

龍樹大士世にいでて

難行易行のみちおしえ

流転輪回のわれらをば

弘誓のふねにのせたまう

(真宗聖典 四九〇頁)

そこに流転輪回のわれらをばという。この言葉はね、有難いというか。心に沁み通りますね。くどいように申し上げるかもわかりませんが、くどいように言って、私は言い過ぎではないと思うのですが、龍樹大士世にいでて。世にいでてということも、よくぞよくぞ出世してくださいましたと。本師親鸞世にいでて。正確に言えばそういうことだと思ふのですよ。よくぞよくぞこの世界にね、現れてくださった。

龍樹大士世にいでて 難行易行のみちおしえ。人間はどうしても難行の道に迷うということがあつ。捉われるということがあつのですよ。そこに難行の道から易行道へ。本願の仏道へと教えられていくという。龍樹ほどの方がね、易行の大道を表してくださいましたということは本当に大きな意味、大きな仕事であると思ふ。

流転輪回のわれらをば。これも流転のあなた方ではないです。流転輪回の彼らではないです。流転輪回のわれらですよ。我らはそこに親鸞がおるといふことです。それを忘れちゃいけないと思ふますね。流転輪回の悲しい流転を繰り返してきた私たちをですね、弘誓のふねにのせたまう。大きな阿弥陀の本願の大悲の船に乗せてくださった。その弘誓の船は勿論、一人ひとりの孤独であるならば、孤独な心の一番深いところに、闇ならば闇の奥底にまで届いてやまないという本願の船であるという。乗せてくださると。乗托してくださるといふ。

清沢先生が、乗托という言葉を使っておられますけれども。私は大変凄い、素晴らしいことだと思いますね。乗托。信心ということはこういう乗托というようなことをね、生み出すのですよね。清沢先生の言葉で有名な、

自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾にこの現前の境遇に落在せるもの即ちこれなり。

自分自身とは他でもない。絶対無限の妙用に乗托してというね。絶対無限の妙用。如来の大悲の用き。これも哲学用語なのですね。絶対無限の妙用という。使い古されたいわゆる伝統的な仏語に捉われないで。任運というのは如来の大いなるはたらきに任せですね、法爾というのは自ずから然るという。自ずから然らしめられる自然法爾のはたらきです。任運に法爾にこの現前の境遇に。自分自身が今ある境遇に、落在せるもの即ちこれなりと。絶対無限の妙用に乗托して本当に生きていくことができるという愁いや悲しみがあっても生きていくことができるというそういう表現なのですけれども。

落在ということも素晴らしい言葉です。落ちてあるのですよ。落ちるところまで落ちてあるのですよ。これ以上落ちるところはない。これは親鸞聖人はですね、『歎異抄』の第二章では、

地獄は一定すみかぞかし

(真宗聖典 六二七頁)

と言われておりますよ。人間はどうしても高登りをしたいのですよね。高登りをする代わりに落ちるのですよ。落在ということは現実の事実にしかりと立って生きることができるというそういうね。まあ流転輪回のわれらをばと、私たちは嫌と言えないのですよ。我らと言われるとね。ああ親鸞様がそうかと。流転輪回のわれらをば 弘誓のふねにのせたもうというそういう和讃で歌われております。非常に大きな謝念、感動をもって、この「正信偈」が歌われておることが伺える次第であります。

時間が経ちましたので、今日は「顕示難行陸路苦 信樂易行水道楽」の一行二句ではありますが、話の方はこれで終わらせていただきます。どうも有難うございました。